

風邪に抗生物質は不要です

2018.04.02

A型で始まり、その後B型が流行し、最後にまたA型が流行したインフルエンザはようやく終わりを告げようとしています。卒業式の時にインフルエンザだったというお子さんもいて、つらい年度末だったようです。

子どものうちにかかる多くの病気はウイルス性のものが95%と言われています。溶連菌感染症は細菌の感染症ですので、抗生物質が必要ですが、インフルエンザはウイルス性のものですから、初期には抗生物質が必要と思われる人はほとんどいません。

いわゆる風邪といわれる急性上気道炎やゼロゼロするような急性気管支炎でもその多くはウイルス性のもので、発熱があっても抗生物質が必要と考えられる例は5%あるかないかと考えられています。

子どものうちにかかる病気のうち、ワクチンがあるものはワクチンで予防するというのが原則です。多くの人がいまだに信じている罹ったほうが免疫が良くつくというのは、合併症のことを考えると間違いであると思ってください。

抗生物質も同じです。抗生物質の歴史はペニシリンの発見から今まで、耐性菌といかに対決するのかの連続でした。必要でない人に心配だからとか念のためと間違った形で抗生物質を使っていると、最終的には抗生物質が効かない細菌が増えていきます。こうした細菌に感染しまった場合、お年寄りの場合には命にかかわったり、子どもの場合には口から飲む抗生物質が効かないために入院での治療を強いられたりすることがすでに起こっています。

このため、入院施設のある病院では抗生物質を使うことに規制をかけたりしていましたが、4月の診療報酬の改定から、小児科の外来でも急性上気道炎や感染性下痢症などで抗生物質の治療を行わない旨の診療をした場合には、診療報酬での加点を認めてくれるようになりました。

必要なワクチンを早期に行うこと、子どもの診療ではいたずらに抗生物質を求めないこと、こんなことが常識となっていくことを願ってやみません。